

北京大学蔵『音学臆説』について

著者	花登 正宏
雑誌名	集刊東洋学
巻	49
ページ	54-71
発行年	1983-05-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132293

北京大学蔵『音学臆説』について

花 登 正 宏

(一)

北京大学附属図書館に『音学臆説』（以下「臆説」と簡称。登録番号□4144031）という書を蔵する。一函二冊の手抄本である。卷一冒頭に、大興李汝珍松石撰とあり、小説『鏡花縁』の作者として世に知られる李汝珍の手に成ることがわかる。李汝珍は音韻学に造詣深く、『李氏音鑑』（以下「音鑑」と簡称）をこの方面における彼の著作として挙げる事が出来る。

本稿は、北京大学現蔵の「臆説」こそが実は「音鑑」の稿本であることを、両書を比較することによって明らかにするとともに、『音鑑』に附された序跋等に基いて推測された、従来の該書の成書年代について疑義を呈し、新しい見解を示すことをその目的とする。また、両書の比較検討を通じて、旧中国において、一冊の書物が如何にして成立するか、その過程についても、その一斑を明らかにするこ

とが出来るはずである。

(二)

まず、『臆説』について概説する。

本書は、縦二十四・五厘、横十六・一厘、版匡は縦十八・六厘、横十二・五厘の抄本で、二冊に分訂される。本文は每半葉六行、一行二十二字である。全書にわたり、墨書による抹消、或いは紙片を貼付しての修正等極めて多く、その定稿本でないことが看取される。

第一冊第一葉に「曾在潘／景鄭家」の二行の印記があるが、未詳。第二冊第一葉には、中に「余氏」と記す葫蘆形の印章がある。本書に序を寄せた者に仁和の余集という人がおり、この人は『音鑑』の刊行にも関わりをもったことが知られている⁽¹⁾。そこで、この印は或いは余集のものかとも思われるが、確証はない。

本書は全六巻（巻六は上・下に分けられており、第一冊には巻一より巻三まで、第二冊には巻四より巻六までが各々収められている。

本書には次のようなものが収められている。参考のため、嘉慶十五年刊『音鑑』（嘉慶本）及び同治戊辰重修本『音鑑』（同治本）と対照して示すこととした。

臆 説	嘉 慶 本	同 治 本
1 余集序 嘉慶10年9月	1 余集序 同上	1 余集序 同上
2 石文燧序 嘉慶9年庚子至前10日	2 石文燧序 同上	2 石文燧序 同上
3 李汝璜序 嘉慶9年孟秋	3 李汝璜序 同上	3 李汝璜序 同上
4 目録	4 李氏音鑑卷首 ・撰者・校訂者・参訂者名 ・同治 ・同治 ・同治	4 音鑑題詞 附嘉慶21年李汝璜識語
5 本文（自卷一至卷六上） 訂者・参訂者名・校訂者・参訂者名	5 李氏音鑑卷首	5 李氏音鑑卷首
6 目録	6 本文（自卷一至卷六）	6 目録
7 卷六下 附吳振勳識語	7 吳錫麒後序	7 本文（同上）
8 許桂林後序 嘉慶12年	8 許桂林後序 同上	8 許桂林後序 同上
9 吳振勳後序 嘉慶15年	9 吳振勳後序 同上	9 吳振勳後序 同上
10 李氏音鑑書目 附洪亮吉識語	10 李氏音鑑書目	10 李氏音鑑書目

この対照表について、若干説明しておかねばならないことがある。

(一)『臆説』巻六下「釈例」は『音鑑』の「凡例」に相当する。また、この「釈例」には吳振勳の識語があるが、『音鑑』では吳振勳後序となっている。文章は全く同じである。ただ『音鑑』では嘉慶十五年との記載があるが、『臆説』には年月の記載はないのが注目される。

(二)余集・石文燧・李汝璜の序文は、『臆説』『音鑑』で共通する。詳細については、後節で論ずることとした。

(三)吳錫麒後序は、嘉慶本にのみ存する。

(四)嘉慶二十一年の李汝璜識語の附された「音鑑題詞」は、同治本のみに存する。

(五)「李氏音鑑書目」も同治本のみに存する。

(六)同治本『音鑑』の版心には、嘉慶本と同じく「寶善堂」の字様があり、両者は同版と思われる。また、同じく同治本でありながら、その中味の配列に異同のあるものもある。

次に、巻一より巻六までの本文の内容についてみていくこととする。本文は問答体になっていて、この点について『音鑑』と異なるところはない。以下に『臆説』本文の内

容の細目を記す。ここでも『音鑑』と対照させて示すこととする。

『臆説』

卷一

- 第1問字音総論
- 第2問音聲総論
- 第3問音韵字母論
- 第4問五聲音母論
- 第5問五音論
- 第6問五音所主論
- 第7問古韵書論
- 第8問字母音異論
- 第9問古今音韻竝行論
- 第10問古今音異論

卷二

- 第11問字母総論
- 第12問韻切総論
- 第13問母韵総論
- 第14問切分粗細論
- 第15問字母粗細論
- 第16問平仄陰陽論

『音鑑』

卷一

- 第1問字音総論
- 第2問音聲総論
- 第3問音韵総論
- 第4問五音総論
- 第5問古韵書総論
- 第6問字母音異論
- 第7問古今音異論

卷二

- 第10問字母総論
- 第11問反切総論
- 第12問母韵総論
- 第13問切分粗細論
- 第14問字母粗細論
- 第15問平仄陰陽論

第17問仄無陰陽論

第18問廻環切音論

第19問顛倒切音論

第20問母韵重切論

第21問自切論

第22問雙翻論

第23問雙聲疊韵論

卷三

第24問切音初学論

第25問初学入門総論

卷四

第26問北音入声論

第27問南北方音論

第28問論著述本意

卷五

第29問古今字母論

第30問射字総論

第31問擊鼓三次成字論

第32問擊鼓五次成字論

第33問著松石字母総論

卷六上

第16問仄無陰陽論

第17問廻環切音論

第18問顛倒切音論

第19問母韵重切論

第20問自切論

第21問雙翻論

第22問雙聲疊韵論

卷三

第23問切音啓蒙総論

第24問初学入門総論

卷四

第25問北音入声論

第26問南北方音論

第27問古人方音論

第28問論著述本意

卷五

第29問空谷傳聲論

第30問擊鼓射字総論

第31問擊鼓三次論

第32問擊鼓五次論

第33問字母総論

卷六

両者ともに設問数は三十三あるが、『臆説』第五・第六間はひとつにまとめられて、『音鑑』第四問となり、『音鑑』第二十七問に相当するものは、『臆説』に存在しない等、その内容に少く異同のあることが看取される。さらに、その配列順序にも異なる所があり、標題名も完全には一致しない等の違いは見られるが、両者の間に密切な関係のあることは疑いない。

57 北京大学蔵『音学臆説』について(花 登)

以上、まず全体的構成について、ついで卷一より卷六までの本文の内容を示す標題について、『臆説』と『音鑑』とを比較してみたが、この両者は別種の書とするには余りにも酷似している。両者には各々余集・石文燁及び李汝璜の序が附されているが、後節に詳述することく、ごく一部の文字に違いがみられるのを除いて、これらは全く同文である。つまり、同一の序が一方では『音学臆説序』とされ、他方では『李氏音鑑序』とされているのである。してみると、『臆説』は実は或る段階における現行『音鑑』の稿本であり、その刊行に際して、本文等に修改が加えられ、さらに書名も『音鑑』と変更されたものである、と考える

ことが出来るのである。このことは、卷一より卷六に至る両者の内容を仔細に検討することにより、一層明らかとなる。

〔第二節注〕

- (1) 『音鑑』の初刊本である嘉慶本の見返し封面に「仁和余秋室先生鑒定」とある。余集、字は蓉裳、浙江仁和人。『秋室学古録』の著があり、余秋室の余集であることが分る。なお、同治本の封面は嘉慶本と異なっており、余秋室云々の字様はない。
- (2) 例えば、北京大学所蔵本では、石文燁序と李汝璜序及び音鑑題詞と李氏音鑑卷首の前後が各々いれかわり、京都大学人文研究所蔵本では、許桂林後序が余集序と石文燁序の間に入っている。應裕康『清代韻圖之研究』(弘道文化事業有限公司刊。一九七二年)によれば、李汝璜序・余集序・許桂林後序・石文燁序・音鑑題詞の順に配するものもあるようである(五二七頁)。
- (3) 第五節参照。この三篇の序文については撮影を許可されたが、第五節にはその内の李汝璜の序のみを掲げ、参考に供することとした。

(三)

本節では、『臆説』卷一から卷六に収められた内容について『音鑑』との比較検討を行なう。

まずはじめに、『臆説』卷一冒頭に載録せられている撰

者・参著者・校者及び参訂者名についてみていくこととする。幸い、この部分の撮影を許可されたので、『音鑑』の同部分と併せ掲載しておくこととする（『音鑑』⁽¹⁾）。

『音鑑』において、『劉駿發音義』の一行が新たに付け加えられたのを除き、両者に挙げられた人物が一致しているのにまず驚かされる。『臆説』が『音鑑』の稿本であることの一証として挙げ得ると考える。

なお、『臆説』で校者として挙げられている、（李）徐翱希文・徐翔鳳田が、各々『音鑑』の時翔書圃・時翔安圃であることは、『音鑑』巻五に「書圃姪附青玉案字母詞」（五・6・a・8）⁽²⁾、「安圃姪附謝池春字母詞」（五・6・b・2）

とあるのが『臆説』で「希文姪附青玉案字母詞」・「鳳田姪附謝池春字母詞」とあるのより明らかである。従って、「徐」字・「時」字のいずれかは誤りということになろう。

『光緒順天府志』巻一一八・人物志・举人表に、嘉慶十八年科第のものとして李徐翱の名を挙げている。これが李汝珍の姪と同一人物であるとすれば、「徐」に作るのが正しいこととなる。

さらに、『音鑑』では名の下を号で統一した可能性が高いことを指摘できると考える。いま徐銓を例として説明する。『光緒順天府志』巻一一八・人物志・举人表に、嘉慶九年の科第者として徐銓を挙げる。それによると、「字士

音學臆說卷一

大興李汝珍松石撰

弟 汝琮宗玉參著
姪 徐翔布文
徐翔鳳田校

許桂林月南

徐 銓士衡

海州吳振勛容如順天陳雲遠受同參訂

許喬林石華

徐 鑑容倩

韵者均也鵠冠子曰五聲不同均益以不均為均而韵

李氏音鑑卷首

弟 汝琮宗玉參著

大興李汝珍松石撰

姪 時翔書圃校
時翔安圃

山陰劉駿發開之音義

許喬林石華

徐 銓藕船

海州吳振勛容如順天陳雲遠受同參訂

許桂林月南

徐 鑑香垞

凡例

一切音之學前人韵書雖列攝字開合等法顧其要

李氏音鑑

凡例

凡例

図 II

図 I

銓、乙丑進士」とある。さらに同書卷一二六・藝文志に徐銓の『藕船詩稿』が著録され、そこには「銓、号藕船、大興人、嘉慶十年進士、河南光州知州」とあり、藕船の号であることがわかる。なお、『臆説』には士銓、『順天府志』には士銓とあって、両者同じくないが、その名銓より考えるに、士銓とあるのが或いは正しいかと思われる。

ところで、胡適氏は許桂林について、『中國人名大辭典』に基き「字月南」とするが、蕭一山⁽³⁾『清代學者生卒年及其著述表』は「字同叔、号月南」とし、『清代樸學大師列傳』卷六にも「字同叔、号月南、又号月嵐」とあり、月南は号であつたと思われる。⁽⁴⁾（なお、『清史稿』儒林伝も同じ。）

また、徐鑑については、『音鑑』に「徐氏藕船、徐氏香垞」（五・19・b・556）とあるのが『臆説』では「徐氏士銓、徐氏士茹」となっており、香垞がやはり号である可能性は高い。容倩と士茹の關係如何については不明である。

許喬林については、道光刊『弇榆山房詩略』十巻の著があることが知られているが、その他については未詳。

李汝珍・李汝琮については、各々松石・宗玉を字とするのが一般であるが、実はそれらが真に字であるかどうかについては確証があるとは思われない。たとえば、樓雲野客（許桂林）の『七嬃』・『洗炭橋』首段に「頃見松石道人作鏡花縁演義」とあり、この記し方よりみて号であつた可能

性もないわけではない。その他の人については未詳。

以上、未詳のもの、断定し難いものもあるが、刊行に際し『臆説』のこの部分に何らかの意図をもって修改の施されたことは疑いないようで、その場合、名の下は号で統一された可能性の高いことを指摘するにとどめる。

次に、第一問より第三十三問までの内容について比較検討する。なお、『音鑑』第二十七問古人方音論に相当する部分を『臆説』は缺いている。よって、ここではこの部分については論じないこととする。

『臆説』第二問・第十一問・第十七問・第十八問及び第二十九問は、一部に文字の異同があるのを除き、『音鑑』の相当部分と一致する。うち、第十七問の如きは、措辭の細部まで『音鑑』第十六問と完全に一致し、両者が稿本と定本の關係にあることは、まず疑いないと考えられる。

そのほかの部分については、両者には相當に異なる部分も存在するものの、論じている内容自体には大きな変更は認められず、『臆説』の不備な部分を修改し、全書の統一をはかったものと見做し得る。『音鑑』で『臆説』に修改を加えた点は、概略以下の数項にまとめることが出来る。

(1) 文字・文章に手を入れた部分がある。

(2) 内容的に豊かになっている部分が多い。当然、そこでは字数の増加が見られる。内容の豊富化は、次の二点に起因する。

a 『臆説』に元来無い部分をふやす。

b 他書の引用例を豊富にする。

(3) 『音鑑』で、『臆説』の一部を削除したところがある。

(4) 反切に変更を加えた部分がある。

以下では、代表的なものを例として挙げ、これらについて検討していくこととする。

(1) 文字・文章に修改を加えた例

『音鑑』全書にわたり、『臆説』の文字・文章に手を入れ、その統一をはかった例は極めて多く枚挙にいとまがない。たとえば、さきの(4)反切の更改は即ち文字の異同に当るし、(2)及び(3)の如く『臆説』を増刪する場合には、当然その前後の『臆説』の文章に修改が加えられることになる。ここでは、一例のみを挙げておこう。

・『臆説』

四聲之分、始於齊周彦倫、梁沈約因之分韵、自五代以來諸家韻書、止分四聲、不論陰陽、

『音鑑』(六・1・a・3・4)

汝南周彦倫、辨平仄而分四聲、自五代以來、悉本周氏之舊、止分四聲、不論陰陽、

(2) 内容の豊富化の例

『音鑑』は、『臆説』に比べると分量的に極めて増加している。単純に字数のみを比較してみると、たとえば第一問は、『臆説』約六〇〇字に対して、『音鑑』一七五〇字強、第五問は、『臆説』約四六〇字に対して、『音鑑』二三五〇字強と、各々約三倍、五倍に分量の増加していることが分る。このような内容の豊富化は、『臆説』に元来無い部分を増加する、(b)他書の引用を増やすことに起因するが、多くの場合(a)・(b)両者相俟って、この傾向を助長していると言い得る。(a)により大幅な内容の増加のみられるものには、『音鑑』の第七問・第八問・第九問・第十三問・第十五問・第十六問・第十九問・第二十問・第二十一問・第二十三問・第二十四問・第二十六問・第二十八問・第三十問等があるが、『音鑑』第二十七問古今方音論は、『臆説』の方には相当する部分全くなく、(a)の例の最たるものとして挙げることが出来る。

ここでは撮影の許可された『臆説』卷一・第九問古今音韻竝行論を具体例として挙げ(図Ⅲ)、それに相当する『音鑑』卷一・第八問平仄音異論との比較検討を行なうこととする。『音鑑』第八問は総字数一九八〇字、それに対し、『臆説』第九問は約四〇〇字にすぎない。そして、この『臆説』に存する約四〇〇字分については、『音鑑』のこれに相当

12 11 10 9 8 7
 之俗則明洪武正韻與元韻會不同韻會與宋集韻不同。集韻與唐韻不同而唐韻又與六經不同以此論之唐以宋之書是皆不能免俗矣幸而靖興之書不存若靖興諸書在吾知六經亦難免俗矣若謂古是而今非則必悉從古音而後可也。諸古音者唐韻正爲極精。

今於語言誦讀之類悉本唐韻吟之所

20 b

6 5 4 3 2 1
 第九問古今音韻並行論
 或曰吾聞有以今音爲俗音者蓋與古音不同故謂之俗。以此論之則古是而今非矣。曰樂記云凡音者生人心者也。又云情發於聲本於呼吸出乎天然乃天地自然之響應何者爲俗何者爲不俗豈凡夫愚子而能別創一音乎抑今人務與古音相反乎如謂今音與古音不同故謂

20 a

20 19
 斯文申子所謂爲和後之視今不如今之視昔也。古與今並行而不悖焉乎近之矣。

第十問古今音異論
 或曰故問古今音異可得聞乎。對曰即如爲字一音據唐韻註曰都了切都歸端母今無此音韻會註曰了了切了歸端之細母音與近時江幼山左方音同迨正韻註曰尼

21 b

18 17 16 15 14 13
 謂從古而可免俗矣而聞之者莫不駭異則不若今音人易曉也。然既人所共知而謂俗爲非者可乎或由據子意則今是而古非矣。然則古音可廢乎。對曰是何言歟。竊謂古音之亡或有賴於魏功也。今之學者得能隨聲以考古音者亦賴韻書之存也。今雖不能盡從之而豈可不知其音而又焉知千百年後不以今音爲非而復古音之舊

21 a

する後半部分と、極く一部の異同を除き一致する。残りの一五〇〇字強については、『臆説』になく、『音鑑』での増補部分にあたる。

まず、『臆説』と『音鑑』の共通部分について見ていくこととする。文字の異同は僅少で、図Ⅲの11・14・18行目が『音鑑』においては各々「講古音者、顧氏唐韻正為極精」、「……易曉也、既人所共知、而謂俗為非、可乎」、「……其音、又焉知于千年後、……」とある点に差異が認められるにすぎず、まず全く同文と言ってさしつかえない。ここでは、古音と今音とで異なるものがあるが、そもそも音声というものは天然の内より生じるもので、正しい正しくないとか、俗であるとか俗でないとかで律し得るものでない。理解しやすいという点では今音の方が優っているが、かといって古音も廃すべきものでなく、古音・今音は並行して行なわれるべきものである、と述べる。というわけで、『臆説』がここに「古今音韻並行論」との標題をつけているのは、むしろ道理のあることといえる。

ところで、『臆説』では、図Ⅲに見るように、古音と今音で異なるものがあるとは述べるが、その例をひとつも挙げていない。そこで、『音鑑』刊行に際しては、その具体例を挙げることで、より説得力をもたせるよう手を加えられた。それが『臆説』に存しない一五〇〇字強の部分であると考

えられるのである。そこでは、冒頭に「或曰、古今平仄音異、可得聞乎」とあるごとく、古音・今音の違いを平声仄声、つまり声調の異なりということにより代表させて、以下の論を展開している。古音では、「爽」を「霜」、「慶」を「恙」、「命」を「名」、「佩」を「皮」、「夢」を「蒙」のごとくに読んでいたことを、老子・太玄経・易経・詩経・礼記等多くの古書における用例より帰納し、これらは今音仄声であるが、古音では平声であった例として挙げる。さらに、仄声内部における古音・今音間の声調相異の例を数多く挙げた上で、「此皆音隨時變」と述べて、これら古音と今音との違いは時代による音声変化によるものだとする。

声韻調の内、声母・韻母については直接的な言及はないものの、今音・古音で声調の相異する具体例を挙げることににより、これに続くさきの『臆説』・『音鑑』の共通部分の記述はより明晰さを増し、論理的にも一貫したものとなっている。以上のような内容の豊富化によって、「古今音韻並行論」という『臆説』における標題は内容にそぐわないものとなり、『音鑑』で「平仄音異論」という新標題がつけられたのは理の当然といえよう。

ところで、一五〇〇字の増加部分は、古音と今音の比較という、内容の性格にもよるのであるが、古書の引用が極めて多い。このほか、古書の引用が『臆説』に比べて大

幅に増加しているものとしては、第一問・第五問・第七問・第十問・第二十問・第二十二問等がある。古音に論及する際、古書の押韻例を引くのは当然のことであり、また、古書の記載するところにより自説を補強するというのも、中国の書物のありようからいえば、これもまた当然のことであるといえよう。さらに一例を挙げてみよう。『臆説』第一問字音總論の冒頭部分である。

臆説

或有問於松石曰、吾聞倉頡造字甚簡、至於今、可謂廣矣、而其音如字之多乎、對曰、金履祥通鑑前編云、……

音鑑(一)……b21-2.a.c

或問汝珍曰、吾聞上古造字甚簡、至於今、可謂廣矣、其義可得聞乎、對曰、……(中略)……金履祥通鑑前編亦云……

ここに引いた文章にはやや違いがみられるが、内容的には全く同じ問であるといつてよい。ところで、(中略)と『音鑑』にある部分は、その字数二〇〇余りにのぼり、殆んどが古書の引用である。その引用順に列挙すれば、孔安国尚書序・朱子通鑑綱目・孔穎達尚書疏・韋續書法・歷代通鑑輯覽・羅泌路史が引かれ、結繩のこと、書契のこと、倉頡造字のことなどについて述べ、つぎの通鑑前編につづく。中国での書物編纂にあつては、古書による自説の敷衍は一般に必要とされたのであり、『臆説』より『音鑑』へ

の過程においても、それが行なわれたことは、ここに引用した例からも明白であるといえる。

(3)『臆説』の一部を削除した例

『音鑑』には、『臆説』を増補した部分は極めて多いが、その逆、つまり『臆説』に存する部分を削除したところは殆んどない。その数少ない例を一例あげておこう。

『音鑑』第二十六問、『臆説』では第二十七問にあたるところである。標題はともに「南北方音論」で同じい。ここでは、南音と北音の方言的差異について述べているが、その冒頭で「江」と「崗」の音を南方では区別しないことを述べる。その直後の部分、すなわち『音鑑』四・17・b・5の「敢問南音不分者、惟江崗二母乎」の前に、『臆説』では以下の如き一問があるが、『音鑑』では削除されている。

敢問、南音不分者、今皆分而切之、可乎、對曰、豈能枚舉哉、姑略指一二、備錄於後、但南與南、亦有不同、未一槩而論也、(一部略)

京秧切	警秧切	敬秧切	吉秧切
庚秧切	梗秧切	更秧切	格秧切

此亦四江四岡也、南音謂庚辛、或曰京辛、此京庚不分也、茲分而切之、(以下略)

以上、「臆説」と「音鑑」との内容上の比較検討を行ってきたが、問答により論をすすめる形式上の一致、一字一句の異同もなく完全に同一の問答の存在すること、或いは一部に字句の異同はあるもののその殆んどが内容の大筋に變更のないものであることなどにより、「臆説」が「音鑑」の稿本であることは疑いと言え。そこにはまた大幅な増刪もみられるが、それは刊行に際して全書の系統性、論旨の一貫をはかったことに起因するものであり、両者が未定の稿本と刊本の関係にあることに何ら疑義をさしはさむものでないことも、前に述べたことにより明らかであると考える。

〔第三節注〕

(1) 劉駿發の名そのものは、「臆説」第三十二問に「劉開之」駿發贈行香子字母詞」として見える。

(2) 五・六・a・8は、第五卷第六葉おもての八行目であることを示す。うらはbにより示すこととする。以下同じ。

(3) 「鏡花縁的引論」(「中国章回小説考證」所収、一九八〇年上海書店影印本)五一頁。

(4) ただ「国朝著獻類徵初編」卷四二所引の唐仲冕の哀辭には「許生桂林字月南、與其兄喬林字石華、皆海州拳人」とあるが、同じく所引の張維屏の松心日録のあとに「按、許先生一字同叔」ともあり、同叔という字のあったことは疑いない。

(5) 趙蔭棠「李氏音鑑の周圍」(「七嬪與許氏說音」(「国語周刊」

第五十五期、一九三二年)参照。

(6) 「岡」字、「臆説」では「岡」に作る。

(7) 「音鑑」の反切の特徴、及びその表わす音系については或いは別稿により論じる機会があろう。

(四)

次に、現行「音鑑」の成書年代について検討することとする。

「音鑑」の成書年代に論及したものとしては、恐らく胡適氏「鏡花縁的引論」が最も早いのではないかと思われる。この中で氏は、「嘉慶十年(一八〇五)、音鑑成書。(音鑑李汝璣序)嘉慶十五年(一八〇八)、音鑑付刻、是年刊成。(吳振勳後序)」と述べる。嘉慶十五年に刊行されたことについては、見返し封面に「嘉慶十五年鐫」とある嘉慶本の現存することにより疑いの余地はないが、現行本「音鑑」の成書年代を嘉慶十年とすることについては、検討の余地なしとしない。李汝璣の兄である李汝璣の音鑑序には、

歸來仲弟(汝珍——引用者注。以下同じ)以所撰音鑑進、流覽浹日、洞見元本(李元「音切譜」、拈字得切、如響赴節、為之狂喜、……今付劖劂、將以就正海內士、余樂觀厥成焉、時嘉慶十年歲在乙丑孟冬月、大興李汝璣佛雲識、

とある。

この李汝璜及び余集・石文燐の序は、現行『音鑑』では皆嘉慶十年に撰述されたこととなっており、これらに基いて、胡氏が『音鑑』の成書の年を嘉慶十年に繫けたのもやむを得なかったと言わざるを得ず、後世の学者でこれに疑義を呈した人もまたいなかったのである。

ところでこの説は、たとえば李汝璜の序が現行『音鑑』のために書かれたものでなく、またその書かれた時期も嘉慶十年でないとなると、即座にその基盤が揺らぐこととなる。そこで次には、『臆説』に見られる、李汝璜・余集・石文燐の三序について考察することとする。

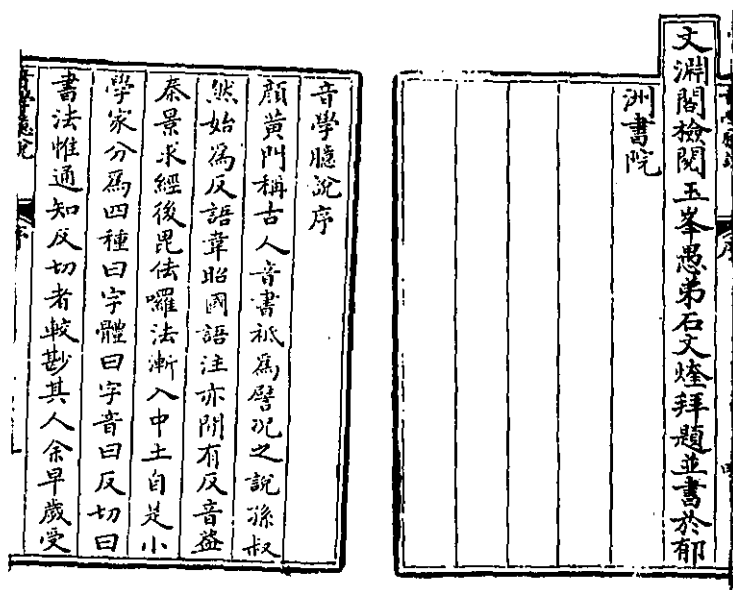
〔第四節注〕

(1) 第三節注(3) 所掲書五一六頁。

(2) たとえば、趙蔭棠氏(『等韻源流』一一六頁。一九四一年)・應裕康氏(『清代韻圖之研究』五二七頁。一九七二年)は嘉慶十年の成書とし、日下恒夫氏(『中国近世北方音韻史の一問題』七四頁。東京都立大学『人文学報』91号。一九七三年)は嘉慶十年以前の成書とする。

(五)

第二節で述べた如く、『臆説』にもこれら三序が附されている。この部分についても撮影を許可されたが、ここで



図IV 『臆説』李汝璜序

書頗闕門徑九弄十二攝二十門三百八
 十四聲驚怖其言若河漢去年子役西川
 得李太初先生音切譜最為賅備執簡竟
 月茫如也歸來仲弟以所撰音學臆說進
 流覽浹日洞見元本指字得切如響赴節
 為之狂喜昔沈存中云梵學入中國其術
 漸密余以為梵學入中國其術漸興可矣
 以云乎密仲弟所撰其庶幾與夫以余譜
 固猶得速寤矧世之英雋者也今付剞劂
 將以就正海內士余樂觀厥成焉時
 嘉慶九年歲在甲子孟春月大興李汝璜
 佛雲識

は李汝璜の序のみを録し參考に供することとする。
 さて、『臆説』の三つの序文を精査してみると、驚くべ
 きことにそれぞれ『音鑑』附載の序とほぼ完全に一致する。
 『臆説』の三序で「音学臆説」とあるところを、『音鑑』で
 は「李氏音鑑」又は「音鑑」としているほか、一致しない
 点としては以下の数箇所が挙げられるにすぎない。

李序	石序		余序				序名	
	2	1	4	3	2	1	番号	
時嘉慶九年、歲在甲子 孟春月	困敦長至之前十日、	攷古編	是為序、時嘉慶十年九 月、世弟仁和余集書、	其說為尤詳	大約折衷仁祖欽定音韻 闡微之合声	堪輿之術	臆 說	
時嘉慶十年、歲在乙丑 孟冬月	長至前十日、	攷古編	是為序、嘉慶十年九月、 賜進士出身、日講起居 注官、咸安宮總裁、教 習庶吉士、前充四庫三 通官纂修、翰林院侍讀 學士、今補翰林院侍讀、 世弟仁和余集書	其說甚詳	悉遵仁祖御定音韻闡微 之合声	篆隸之類	音 鑑	

このことより、『音鑑』に附された、余集・石文燐・李汝璜の三序のいずれもが、元来は『臆説』に対して書かれた序であること、つまり、『音鑑』の成書を見た上で書かれたものではないことが理解されよう。

ことに注目すべきは、石序及び李序について、『臆説』と『音鑑』とでその撰述時期に相違のみられることである。つまり、

『臆説』

『音鑑』

石序 嘉慶九年閏逢凶敦(甲子) → 嘉慶十年乙丑
 李序 嘉慶九年甲子孟春 → 嘉慶十年乙丑孟冬

のように、撰述時期に変更が加えられているのである。

この間の事情は次のように解すべきであると考えられる。石文燐・李汝璜が見たのは『音鑑』でなく『臆説』であり、彼等はこの『臆説』に対する序を撰したが、それは嘉慶九年のことであった。第四節に引用した李序よりみて(但し、^{嘉慶九年孟春}は嘉慶九年の初めには一応の完成を見ていたこと、さらに刊行の企図のあったことが窺われるが、実際の刊行に際しては、既述の如き修正が施され、書名も『音鑑』と改められた。石・李の二序については、各々字句の一部に修改が加えられ、また撰述期日も変えられた上で、そのまま『音鑑』の序として刻に付された。このように考えて、まず間違いはなからう。

では、嘉慶十年に李汝璜が付刻前の『音鑑』を見る機会があったかどうかであるが、まずその可能性は少ないと言わざるを得ない。というのは、『臆説』の余集の序の撰述時期は「嘉慶十年九月」とされているが、これについては『音鑑』も変更を加えていないからである。すでに第二節で述べたように、余集は『音鑑』の刊行に大きく関与した人である。その余集が、嘉慶十年九月の段階で見たのが、『音鑑』でなく『臆説』であったということのもつ意味は重い。嘉慶十年九月には、『音鑑』という書はまだ存在していなかった。その一ヶ月後の十月(孟冬月)に、李汝璜が付刻前の『音鑑』を見たというのは、第三節で述べた『臆説』・『音鑑』両書間の更改の大きさを考慮に入れるならば、現実性に乏しいと言わざるを得ない。

以上に述べてきたことにより、李序に基く現行『音鑑』の成書年代の推定は、その根拠を失ったことが理解されよう。

(六)

それでは、現行『音鑑』の成書年代は一体何時かということになるが、証拠に乏しく、その決定は難しいといわざるを得ない。とはいえ、おおよその推定は不可能でない。

『臆説』には無く、現行『音鑑』付刻の際に新たに付け

加えられたものとして、許桂林後序がある。その撰述は、『音鑑』によれば嘉慶丁卯二月、すなわち嘉慶十二年になされたとする。それには、

松石姊夫、博学多能、方在昀時、與余契好尤篤、嘗縱談音理、上下其說、座客目瞪舌搖、而兩人相視而笑、莫逆於心、今所著音鑑、將出問世、遠以見寄、屬之參定、余讀其書、精而能詳、……謹次為後序、以質海內之深於音者、

とある。『臆説』には許氏後序の存しないことでもあり、たしかに許桂林は『音鑑』と題された書を目撃したものと思われる。このことはさらに、許桂林の撰になる『説音』の自序（嘉慶十二年四月既望撰述）に

往歲、為北平李松石作音鑑後序、山陰余杏林、素未相知、題詩激賞、天下不少知音者、桂林所為謄口說而不燭煩也、

とあることよりも証される。遅くとも嘉慶十二年二月には、たしかに『音鑑』という名の書は存在していたのである。ただ、『音鑑』許後序の終りには嘉慶丁卯二月とあるが、『説音』序（同年四月既望）には「往歲、為北平李松石作音鑑後序」とあることより、実は、許桂林はその前年嘉慶十一年に

『音鑑』を落手し、後序を撰したが、李汝珍とその居所が懸隔していたため（許後序に「今所著音鑑、將出問世、遠以見寄」とある。）李のもとにとどいたのが嘉慶十二年であつた可能性が高い。このことは、許桂林が『音鑑』後序を撰したとき（遅くとも嘉慶十二年二月）すでに山陰の余杏林の「題詩」の存在を知っていたことよりその一端を窺い得る。

ここにいう余杏林が、同治本『音鑑』で新たにつけ加えられた「音鑑題詞」の撰者たる余杏林であることは、「題詞」末の李汝珍の識語に、

甲戌（嘉慶十九年）冬、余在東海、得山陰俞子杏林刊行傳聲正宗、……卷後有音鑑題詞、極蒙推許、余愧不敢當、而詞旨清新、……爰取杏林題詞、續刊音鑑後、並贅數語、以志欣幸、

とあることより明らかである。『傳聲正宗』の刊行年については未詳であるが、俞氏（或いは余氏）が、自著『傳聲正宗』の付刻前、少なくとも嘉慶十二年二月以前に『音鑑』の江間に流布する一抄本を見ていたことは、まず疑いない。とすれば、『説音』序の「往歲、為北平李松石作音鑑後序」の記載と併せ考えて、嘉慶十一年には『音鑑』なる書が存在していたとするのは、あながち無理な推定ではあるまい。余集の『臆説』序が撰せられたのは嘉慶十年九月であつ

た。その翌年嘉慶十一年、「臆説」は修改の上、その名も「音鑑」と改められたのであると考えられる。

〔第六節注〕

(1) 「聲韻要刊」所収（北平松筠閣排印本）。

(七)

以上に述べてきたことをふまえて、「李氏音鑑」の編述過程をまとめ、むすびにかえることとしたい。

李汝珍は少くして穎異、その学は多岐にわたったが、こゝに音韻学には造詣が深く、音韻学の初学入門書の撰述を企図した⁽²⁾。

その撰述に際しては、多くの人に教えを請い、また同好の士に意見を徴するなどしたが、益を受くる所多く、そのようにして得た説の多くを自著の中に採り入れた⁽³⁾。一応の成書を見、その書名を「音学臆説」とした。

長らく篋底に秘めていたが、多くの手抄本が世上に流布し、その結果、魯魚の誤りの後世に伝わることをおそれ、剗削に付すこととし、稿本の作成を吳振勳に委嘱した⁽⁴⁾。はじめ「臆説」の刊行を期したのは、遅くとも嘉慶九年初春以前であつた⁽⁵⁾。そのとき、石文燾・余集の各氏に序を属

することを求め、彼等はそれに応じた⁽⁷⁾。

その後、さらに書物としての体裁をととのえるため大幅な修改・増刪が行なわれたが、それはとくに論旨の一貫・体系化をはかることに主眼がおかれ、論じる内容そのものには大きな変更は加えられなかった。その際、古書の引用が大幅に増やされ、古書の述べるところにより自説を敷衍するといふ伝統的な方法が採用された⁽⁸⁾。その上で、書名も「李氏音鑑」と改められた。その時期は、おそらく嘉慶十一年とみられる⁽⁹⁾。そうしたのち、「音鑑」と名を改められた稿本を許桂林に送付し、許はそれに対して後序を撰した⁽¹⁰⁾。

また、国子監祭酒吳錫麒にも序を請い、その上で剗削に付した⁽¹¹⁾。当時著名な刻工であつた劉文奎がそれを刻し、見返し封面には「仁和余秋室先生鑑定」の字様をつけ、寶善堂より刊行された。嘉慶十五年のことであつた。

〔第七節注〕

(1) 大興李子松石、少而穎異、讀書不屑屑章句帖括之学、以其暇旁及雜流、如王通星卜象緯堪輿之術、靡不日涉、以博其趣、而於音韻之學、尤能窮源索隱、（余集臆説序）

(2) 珍不揣固陋、撰音鑑六卷、仿歐陽文公易童子問、設為問答、期於約義賅理、淺言發蒙、庶後進有所遵循、或亦求者之捷徑也、（音鑑卷一冒頭）

(3) 即如同母十一韻、亦由數年同人切磋而成、非珍一人所能為耳、王寅之秋……受業於凌氏廷堪、仲子夫子、論文之暇、旁及音韻、

受益極多、母中麻韻、卽夫子所増也、……近年得切磋者、許氏石華、許氏月南、徐氏藕船、徐氏香垞、吳氏容如、洪氏靜節、是皆通韻學者也、……至同母十一韻、香垞月南各増二、藕船一、餘五韻則珍所補耳、（音鑑卷五第三十三間）

汝珍が意見を徴した人の多くは、参訂者として名を列ねている。
第三節 図Ⅰ・図Ⅱ参照。

(4) 斯稿久置筒篋、緣同志每借傳抄、誠恐魯魚亥亥、貽誤將來、姑付剞劂、以俟博彥指正云、（音鑑凡例末の嘉慶十五年李汝珍自識）

(5) 聘齊世伯音学臆説成、將付剞劂氏、屬勳握管、勳粗知弄筆、有乖入木之術、固辭不獲命、遂寫成稿本、（臆説卷六下积例末の吳振勳識語）

この文は、『音鑑』では後序とされ、嘉慶十五年に書かれたものとしているが、『臆説』には撰せられた年の記載はない。

(6) 歸來仲弟以所撰音学臆説進、……今付剞劂、將以就正海内士、余樂觀厥成焉、（李汝璜嘉慶九年孟春月音学臆説序）

(7) たとえば、石文燐嘉慶九年の『臆説』序は、次の如くである。
（先生）今來响浹月、讀其書（『臆説』）、接其言論風旨、……臨別屬序於余、不獲辭而忘其景慕者如此、

(8) 第三節参照。

(9) 第六節参照。

(10) 今所著音鑑將出問世、遠以見之、屬之参訂、余讀其書、精而能詳、……謹次為後序、以質海内之深於音者、（許桂林嘉慶十二年後序）

なお、本文の修訂は書名を『音鑑』と改め、許桂林等に送付し、彼等の意見を聞いたのちにも行なわれたものと考えられる。許以外の参訂者に意見を徴すべく、『音鑑』稿本を送付したこと

は文獻上明らかにし得ない。しかし、付刻に際し、許に参訂者になってほしい旨の委嘱を行なっているとより判断して、現行『音鑑』の参訂者として名を列ねる他の人々にも、同様の処置を講じたであろうことは、想像に難くない。

(11) 大興李君松石、將刊其所著音鑑、以問世、而來督序於余、（吳錫麒音鑑後序）。この序は嘉慶本にのみあり、同治本では削られている。

(12) 吳錫麒序の末尾に「江寧劉文奎鐫字」とある。この字樣も同治本にはない。なお劉文奎については、『書林清話』卷九・古今刻書人地之變遷の条に「乾嘉時、如盧・鮑・孫・黃・張・秦・顧・阮諸家校刻之書、多出金陵劉文奎・文楷兄弟」と見える。

(13) 同治本では、見返し封面は新たに刻し直されており、この字樣はない。